

## 連載 オブジェクト指向と哲学

### 第 50 回 オブジェクト指向を分析する - 白馬非馬

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

前回は概念の分類方法について「木を見る西洋人、森を見る東洋人[1]」をヒントに考えました。ツリー構造による分類は西洋人の「世界を分析的に捉える」認識方法であり、集合と部分集合で捉える分類は東洋人の「世界を包括的に捉える」認識方法と親和性があると思いました。

今回は公孫竜（紀元前 320 年頃-250 年頃、ウィキペディア）の「白馬は馬にあらず」を題材にして「本質」という概念について考えてみたいと思います。

#### ●白馬論

前田利鎌「臨済・荘子」によると、荘子（紀元前 369-286、ウィキペディア）は「明らかに彼が知っていたに違いないと推定できる」公孫竜子の白馬論とは、

--

馬とは形即ち実体に命名されたものであり、白とは色即ち属性に命名されたものであって、形に命名されたものでない。馬といえ、黄黒馬も皆その中に這入るが、白馬といえ、黄黒馬の如きは否定される。故に、白馬は馬ではない。[2]

--

「白馬は馬にあらず」というのなら、「紋白蝶は蝶にあらず」であり、「鈴虫は虫」にあらずとなり、概念の分類構造に基づく人の認識システムが成り立たなくなってきました。これは詭弁なのですが、古代ギリシャと同じ時代に遠く離れた中国でもこのような議論がなされていたことに興味を惹かれます。

--

公孫竜子の論旨が正当であるか否か、というところにあるのではなくて、当時已に、実体と属性の関係が少なくとも論ぜられていたことと、この場合「形」ということが実体と同一視せられて、更にその強調が属性よりもむしろ実体に置かれていたということである。[2]

--

アリストテレスは本質と付随的な属性を明確に分離しています。色は本質とは別であり白馬も黄黒馬も馬という種に属し、白馬も黄黒馬も馬です。

色と形は合体して分離できないが、概念として分析的に考えて行くのは西洋式捉え方です。対

象を包括的に捉え分析しないのは東洋式捉え方です。公孫竜は白馬も黄黒馬もそれらをそのまま  
で色と形を分離しないで捉えてしまうから馬ならずとなってしまう。では公孫竜のいう馬とは一  
体何でしょうか。どんな馬を持ってきても **xx** 馬となってしまう、これが馬そのものというものは  
ありえません。本質は概念としてのみ存在し、目の前に差し出すことはできません。だから存在  
しないということにはなりません。本質を説明するのは容易ではありません。

### ●「本質」という概念

この本質というものの議論、プラトンの「メノン」の冒頭の一節を思い出します。本連載「第  
9回 知識とは何か(3) - 想起説」でも紹介しましたが、「徳は教えられるか」というメノンの問い  
かけにソクラテスはそもそも徳とは何であるかを自分は知らないのだと告白します。メノンはそ  
んなことは誰でも知っているとして徳の例を列挙します。男の徳、女の徳、子供の徳、年配の者の徳、  
自由人の徳、召使の徳…。ソクラテスが求めているのは徳そのものの説明ですが、メノンはそれ  
には答えられません。

このあと蜜蜂のたとえが述べられます。

--

ソクラテス：ずいぶんぼくも運がいいようだね、メノン、徳は一つしかないというつもりでさが  
していたのに、徳がまるで蜜蜂のように、わんさと群れをなして君のところにあるのを発見し  
ただから。しかしだね、メノン、ついでにこの蜜蜂の譬えを使って言うと、かりにもしぼく  
が蜜蜂というものの本質について、それはいったい何であるかとたずね、それに対して君が、  
蜜蜂にはいろいろとたくさんの種類のものがあると答えたでしょう。[3]

--

「蜜蜂というものの本質」と訳されていますが、もともと本質をどのような言葉で表現してい  
たのでしょうか。英訳[4]にはそれにあたる言葉がありません。

--

suppose my question had been about bees, and exactly what it is to be a bee

--

英語版では「蜜蜂であるとは何であるか」となります。本質という言葉はありません。

徳の本質を、本質という言葉を使わずに説明するのにソクラテスは苦勞します。

--

ソクラテス：君が挙げたいろいろの徳についても同じことが言える。たとえその数が多く、いろ  
いろの種類のものがあるとしても、それらの徳はすべて、ある一つの同じ相（すがた-本質的特

性) をもっているはずであって、それがあからこそ、いずれも徳であるということになるのだ。この相 (本質的特性) に注目することによって、「まさに徳であるところのもの」を質問者に対して明らかにするのが、答え手としての正しいやり方というべきであろう。ぼくの言おうとすることわからないかね?

メノン: わかるような気はします。でも、思うようには問の意味がまだつかめません。

--

相は英語版では form と訳されていて、「ある一つの同じ相 (すがた-本質的特性)」は英語版では some single form となっています。「まさに徳であるところのもの」は what being good で、相は form ですが本質にあたる言葉はありません。

### ● 「本質」という言葉 - ト・ティ・エーン・エイナイ

--

「本質」と訳されるアリストテレスの用語は、ギリシャ語では「ト・ティ・エーン・エイナイ」という長い言い方で示されるが、直訳すれば「(当のものにとって) あるということは本来何であるか」という意味である。この概念の中心が「何であるか」という点にあるのは明らかである。

[5]

--

アリストテレスはウーシア (実体) の説明のなかで

--

ものになにであるか [ト・ティ・エーン・エイナイ - 本質]、- これを言い表す説明方式がそのものの定義であるが、- これがまたその各々のものウーシア [実体] と言われる。[6]

--

この部分、英語版では、

--

The what-it-was-to-be-that-thing, whose account is a definition, is also said to be the substance of the particular.[7]

--

本質という現在使われている言葉そのものに対応する言葉はギリシャ時代にはまだなく、エイドス (形相)、ウーシア (実体)、ト・ティ・エーン・エイナイ (本質) という用語が状況により使われています。

--

多くの用語は、当時いまだ成立途上にあり、まさにこのアリストテレスなどの自覚と分析によってそれぞれの含む多くの意味が分化し始め、それ以来そのいずれかの意味があるいは主となり従となりつつ幾多の変遷を経て今日に及んでいるので、その多義をそれぞれ特定の仕方一つに含んでいるそれぞれの原語をそのままに伝えうる適訳語が日本語のうちに発見されようはずがない。ことに「ウーシア」はこの書で最も分析さるべき問題の概念である。[6]訳者注

--

本質に当たる概念が何かあるに違いないことはソクラテスもアリストテレスも気付いているのですが、それをどのような名前と呼ぶべきか、言葉としては当時まだ成立途上にあった。したがってソクラテスもその言葉を使わずに徳の本質、蜂の本質という概念をメノンに伝えるのに苦労します。日本語訳も難しい作業になります。言葉以前に概念レベルでの理解が必要です。

西洋ではその後本質概念の分析が進んできたが、東洋では公孫竜の議論は詭弁で終わってしまい、ギリシャのように後が続かなかった。老荘思想 - 老子の無為自然、荘子の万物斉同 - が強く作用すると分析的方向には進まない。

以 上

- [1]リチャード・E・ニスベット、【訳】村本由紀子、木を見る西洋人 森を見る東洋人-思考の違いはいかにして生まれるか、2004、ダイヤモンド社
- [2]前田利鎌、臨済・荘子、1990、岩波文庫
- [3]プラトン、【訳】藤沢令夫、メノン、1994、岩波文庫
- [4]PLATO, Protagoras and Meno, 2005, PENGUIN CLASSICS
- [5]山口義久、アリストテレス入門、2001、ちくま新書
- [6]アリストテレス、【訳】出隆、形而上学、1959、岩波文庫
- [7]ARISTOTLE, The Metaphysics, 2004, PENGUIN CLASSICS